

福祉系短期大学生の福祉職志望意識の変化に  
及ぼす要因の検討 第1報

An Examination of Factors Affecting the Welfare-job Choice  
of Junior College Students Majoring in Welfare

岩 田 裕 美  
H i r o m i I W A T A

長 島 緑  
M i d o r i N A G A S H I M A

南 正 信  
M a s a n o b u M I N A M I

矢 花 光  
H i k a r u Y A B A N A

船 越 利 代 子  
R i y o k o F U N A K O S H I

## 要旨

介護福祉士は他の職種に比較して離職率が高いことから、在学中の学生における福祉職継続志望と学習意欲の変化について調査した。対象を、入学後半年以内の学生と、学内講義を終了し、実習を体験した2年生前半とした。体験を通じることによって福祉職の志望動機への何らかの影響が生じていると考えたからである。仮説として福祉系短期大学の1年生前半と2年生前半では、学生の「福祉職志望を継続する気持ちの変化に影響がある」また、「現在の学習意欲について差がある」とした。方法として入学後の福祉職志望の変化、現在の学習意欲に対する質問を作成し、1年生（入学後半年）2年生（入学後1年半）の学生の質問調査を集計し、Mann-Whitney検定単純集計及びクロス集計を行った。結果、福祉職志望を継続する気持ちの変化では、5項目に有意差を認めた。実習を除く各項目に対して1年生の方がすべての項目の素点が高く、学習意欲では明らかな有意差は認められなかった。よって仮説「福祉職志望を継続する気持ちの変化に影響がある」を認め、「現在の学習意欲について差がある」は棄却された。

2年生後期以降の学習意欲の低下が、就職後の離職率に影響すると考えられた。

Key Word：介護福祉士 学習意欲 志望意識変化

## 緒言

高齢社会の急速な進展，核家族や都市化などの社会形態の変遷と少子化によって，福祉のあり方は，社会全体で生活を支えることの必要性が高まっており，社会福祉基礎構造改革以降，個人の自立支援と選択の尊重，質の高い福祉サービスの拡充，地域福祉の充実を柱とした取り組みがなされてきた。近年，社会・産業構造の変化および労働人口の高齢化がすすみ，それにともなって労働者の職業観も変化している。特に若年層においてはニートやフリーターの増加に代表されるように，「職業」のとらえ方も多様化している。<sup>1)</sup>

一方で，福祉に対する社会的な関心値の増大により，福祉ニーズの多様化，拡大化が生じており，より高度な専門知識や技術の提供と質の高いサービスを提供できる専門職が希求されている。

介護福祉士制度は1987年に法律が施行され20年になる。「介護福祉士等の養成確保のあり方に関する検討会報告書」によれば介護福祉士の養成校は平成17年度の4月時点では，402校，479学科であり年間1万8千人程度の卒業生を社会に送り出している。<sup>2)</sup>しかし，国家試験を受験して介護福祉士になる資格取得者の方が多数であり，養成校を卒業した数の2倍の4万人程度で推移している。

介護福祉士をめぐる現状は，介護保険法の改正，障害者自立支援法の制定がなされ，介護福祉士の資格については，現在のホームヘルパー養成を縮小し，介護技術講習会の開催による介護福祉士の一本化の動向に向かうとも言われている。また外国からの介護福祉士の受け入れも現実化してきており，現在は非常に転換期であり，激動の状況であると言える。また，介護労働実態調査（2005年）では介護職員の就労の状況では入職率は33.1%，離職率21.4%であった。雇用動向調査（2004年）の全労働者の入職率は15.7%，離職率16.0%から考えると福祉系の離職率は全労働者の入職率，離職率よりもそれぞれ上回っている<sup>3)</sup>。この離職率の高さは入学時の志望動機が不明確のまま卒業にいたるまで専門職意識が育まれないためと予想できる。

少なくとも福祉系短期大学生にあっては，国家資格を持った専門職としての介護福祉士になりたいという目的を有して入学するはずである。ところが，学年が進むにしたがって福祉職に就くことを躊躇する学生も少なくない現状がある。こうした背景により福祉職志望意識の変化の影響について明らかにし，介護福祉士養成教育に活用することを目的として本研究を実施した。

## I 研究目的

福祉系短期大学の1年生前半と2年生前半の学生の「福祉職志望意識に変化」について明らかにする。

## II 研究デザイン

### 仮説検証調査

仮説1：福祉系短期大学の1年生前半と2年生前半では、学生の福祉職志望を継続する気持ちの変化に影響がある

仮説2：1年生前半と2年生前半では、学習意欲について差がある

## III 研究方法

1, 研究期間 2006年10月～12月

2, 調査対象：T短期大学 人間生活学科人間福祉の学生（1年生，2年生）

男3名，女39名，計42名（平均年齢19.76歳）

3, 調査方法：入学後の福祉職希望の変化，現在の学習意欲について質問紙を用いて調査。

### 1) 質問紙の作成

①質問項目の決定：先行文献を詳読後，福祉系教員間で意見交換し，質問項目を選定した。

②質問項目の尺度：【福祉職志望の気持ちの変化】は「ある」「なし」の2件法を用いた。

【学習意欲】は「とても思う」を4点，「少し思う」を3点，「あまり思わない」を2点，「思わない」を1点とする4件法にて集計した。

4, 分析方法：1年生（入学後半年）2年生（入学後1年半）の学生の質問調査を集計し，

Mann-Whitney検定（関連がないグループの差のU検定），クロス集計を行った。

分析にはSpss ver, 10ソフトを用いた。

## III 倫理的配慮

本研究の主旨，目的について口頭にて説明を行い，質問紙にも記入し，調査は無記名とし，個人が特定できないように配慮すること，調査データの取り扱いは万全を期し，研究者のみが関わること，学会等の発表の際は，個人情報保護した内容とするよう配慮について説明をした。学生には質問紙を配布する前に以上の事を説明し，調査を実施した。

## IV 結果

### 1, 質問項目の決定

質問項目は大きく分けて2つの内容とした。福祉職志望の気持ちの変化に影響があると思う内

容として8項目とした。また、現在の学習意欲を11項目とした。(表1, 2)

表1 福祉職志望の気持ちの変化に影響があると思う内容として8項目

No	質問項目
1	現在勉強している内容
2	各科目の成績
3	第一段階の実習(2年生のみ)
4	第二段階の実習(2年生のみ)
5	家族の影響
6	アルバイトの経験
7	介護福祉士の待遇
8	その他

注) 設問について(ある, なし)で集計を行った。

表2 現在の学習意欲についての内容11項目

No	質問項目
1	あなたは福祉の授業を、欠席したり遅刻したりせず受けていると思いますか
2	あなたは福祉の授業中に私語を謹んでいると思いますか
3	あなたは前もってシラバスを(授業概要)を読んでいますか
4	あなたは福祉の授業の予習をして授業にのぞんでいますか
5	あなたは福祉の授業の復習をしていますか
6	あなたは板書事項や授業の要点をノートにとっていますか
7	福祉の授業はためになると思っていますか
8	入学前と後では福祉に対する意識は変わったと思いますか
9	福祉施設でのボランティアに興味を持つようになりましたか
10	福祉施設で実習をすることに抵抗はありますか
11	あなたは福祉専攻を選択して満足していますか

## 2, 分析結果

### 【福祉職志望の気持ちの変化】

- 1, 仮説1: 福祉系短期大学の1年生前半と2年生前半では、学生の「福祉職志望を継続する気持ちの変化に影響がある」の検定の結果、「現在勉強している内容」「各科目の成績」「家族の影響」「アルバイトの影響」「その他」の項目の5つに有意差を認め、よって仮説は検証された。また2年生では実習が福祉職志望の気持ちの変化に影響があった。
- 2, 仮説2: 「1年生前半と2年生前半では、学習意欲について差がある」は、クロス集計の結果ではすべての項目において差が認められなかった。よって仮説は棄却された。学習意欲については1年生の方が2年生よりも11項目のうち、9項目が平均値を上回ったという結果が得られた。

表3 福祉職志望の気持ちの変化に影響があると思う内容

番号	設問内容	同順位補正 Z 値	同順位補正 P 値	P < 0.05
1001	現在勉強している内容	3.027645	0.002465	*
1002	各科目の成績	-3.65218	0.00026	*
1005	家族の影響	-3.17775	0.0001484	*
1007	アルバイトの経験	-4.9449	7.63E-07	*
1008	介護福祉士の待遇	0.427618	0.668929	np
1009	その他	-6.41941	1.37E-10	*

Mann - Whitney U 検定

1003, 1004は2年生単独の為比較せず。\*P<0.05

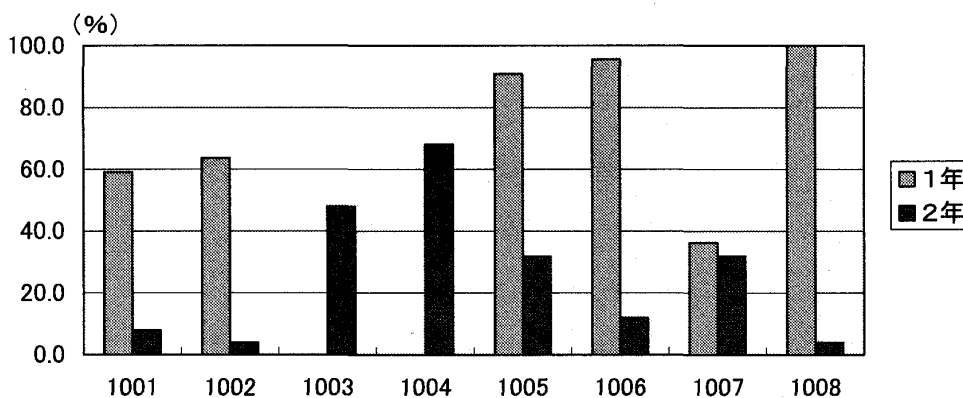


図1 福祉職志望意識の変化に影響がある項目

項目設問1001:「現在勉強している内容」

設問1002:「各科目の成績」

設問1003:「第1段階の実習(2年生のみ)」

設問1004:「第2段階の実習(2年生のみ)」

設問1005:「家族の影響」

設問1006:「アルバイトの影響」

設問1007:「介護福祉士の待遇(仕事, 給料)」

設問1008:「その他」

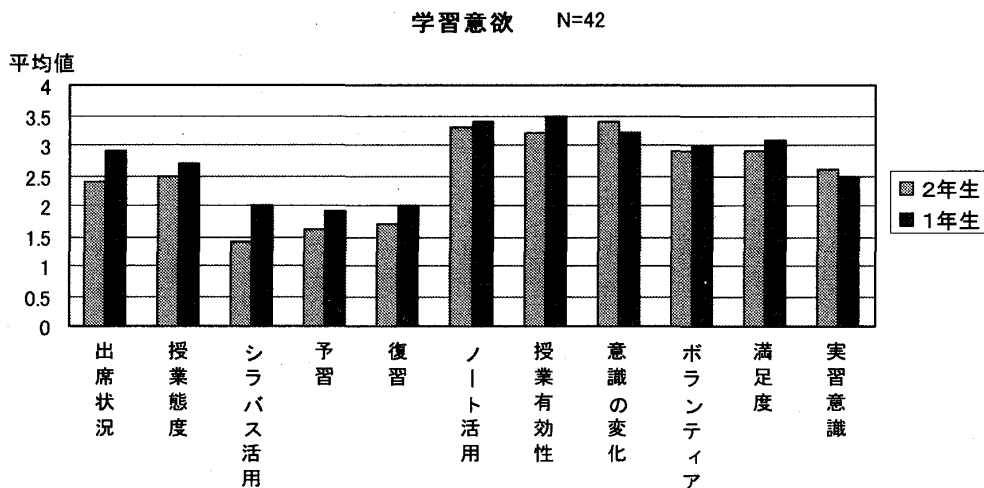


図2 学習意欲

表4 【現在の学習意欲】各項目の平均点と標準偏差(SD)

No	質問項目	1年生 の平均	2年生 の平均	1年生 のSD	2年生 のSD
1	あなたは福祉の授業を欠席したり、遅刻したりせず受けていると思いますか	2.9	2.4	0.94	0.80
2	あなたは福祉の授業中に私語を謹んでいると思いますか	2.7	2.5	0.96	0.75
3	あなたは前もってシラバスを(授業概要)を読んでいますか	2.0	1.4	0.86	0.50
4	あなたは福祉の授業の予習をして授業にのぞんでいますか	1.9	1.6	0.89	0.51
5	あなたは福祉の授業の復習をしていますか	2.0	1.7	1.0	0.56
6	あなたは板書事項や授業の要点をノートにとっていますか	3.4	3.3	0.75	0.64
7	福祉の授業はためになると思っていますか	3.5	3.2	0.6	0.51
8	入学前と後では福祉に対する意識は変わったと思いますか	3.2	3.4	0.77	0.51
9	福祉施設でのボランティアに興味を持つようになりましたか	3.0	2.9	0.8	0.73
10	福祉施設で実習をすることに抵抗はありますか	2.5	2.6	0.87	0.97
11	あなたは福祉専攻を選択して満足していますか	3.1	2.9	0.89	0.79

## V. 考察

福祉職志望意識に影響した内容(表1)の結果(図1)1年生では「現在勉強している内容」、「各科目の成績」の数値が上昇しているが、入学後から半年が経過し、学習が進む中で高校では学んでいない専門的な科目の学習や前期の試験を経験した結果と思われる。「家族の影響」の上昇が1年生に高いのは入学の動機には、親や家族から福祉職を勧められたり、実際に身近に福祉職についている近親者からも影響を受けていることが考えられる。

アルバイトの影響については、ほとんどの学生が何らかの福祉職以外のアルバイトを経験しており、アルバイトの経験則から、実際の労働の体験から社会で働く事の厳しさを知る機会となり、福祉職志望の気持ちの変化に影響していると考えられる。

「介護福祉士の待遇(仕事,給料)」について大きく変化がないのは新聞やテレビなどの媒体により、介護福祉士の現状を知る機会を得ていると考えられる。現在の介護福祉士の賃金の水準が必ずしも高くないことや、規模の小さい事業所においては福利厚生充実が難しいこと、仕事のやりがいや処遇等を理由に転職する者がいる事等の現実があると考えられる。

2年生のみの質問項目である「第1段階の実習(2年生のみ)」「第2段階の実習(2年生のみ)」については、やはり質問項目の中では1番影響があるとの結果が出ている。特に実習第1段階に比較し第2段階の方が影響があることがわかった。第2段階の実習では第1段階のほぼ倍の時間をかけて実習しており、受け持ち利用者の介護を具体的に展開することからも学生にとって精神的にも肉体的にも負担があることが考えられる。

「その他」については自由記載の内容が少なく、その他についての記載がしやすい質問紙の作成の検討が必要である。

現在の学習意欲の項目(表2)についての結果(表4)では、1年生、2年生の両方が「あなたは板書事項や授業の要点をノートにとっていますか」、「福祉の授業はためになると思っていま

すか]、「入学前と後では福祉に対する意識は変わったと思いますか」、「福祉施設でのボランティアに興味を持つようになりましたか」「あなたは福祉専攻を選択して満足していますか」の項目の数値が若干高くなっている。特に1年生はほとんどの項目で2年生より数値が高くなっている。それは入学して半年の1年生の方が入学時の短大への志望意識が維持できているのではないかと考えられる。

逆に1年生と2年生の学習内容の違いを比較してみると調査の時点の1年生はまだ実習を経験しないのに対し、2年生は施設での実習を2回経験する機会が増えることが挙げられる。

したがってこれらの環境要因が学習意欲に何らかの影響があると推測される。今後はデータを増やして追跡調査をする必要があるが、2年生の方が学習意欲が低いことがわかった。この2年生の学習意欲の低下が卒業後の離職率にも影響していることも考えられる。早急に教育のなかでどのように学生の学習意欲を高める方策をとっていか検討しなければならない。学習や実習における達成感をどのように持たせられるかが今後の重要な教育の課題といえる。

本校の教育ではシラバスの再検討や演習内容、実習時期の検討、学生が興味、関心を持てる教材の研究なども重要である。1年生、2年生のコラボレーション学習、卒業生を招いての専門職業人としての講演なども入学後から早期に開始し、専門職業教育（プロフェッション教育）をすすめていく必要がある。

教育内容を効果的に発揮するためにはシステムティックな構築が必要である。学習意欲を持たせるための試みとして「特色ある教育プログラムの実践報告」の中には、地域で暮らす高齢者の生きがいづくりのための学生による企画・運営のアクティビティ活動、動物の飼育や植物の育成をすすめ「いのち」を考えるビオトープ活動等を実践している学校もある。多角的な視点からの教育の方策が必要である。学習成果に影響する要因では「個人の属性」や「職業観」が学生の「入学動機」に影響し、学生を取り巻く「環境」は「入学動機」とともに「学習状況」が「学習意欲」へ、また「学習成果」へと関連しているともいえる。

「学習意欲」を継続し「学習成果」へとつなげるためにも今後は入学動機との関連についても検討が必要である。

## VI. 結論

福祉系短期大学の福祉職志望意識の変化では1年前半と2年前半では、学生の「福祉職志望を継続する気持ちの変化に影響がある」では「現在勉強している内容」「各科目の成績」「家族の影響」「アルバイトの影響」「その他」の項目に有意差を認めた。また2年生では実習が福祉職志望の気持ちの変化に影響があった。

現在の学習意欲について差があるについては、1年生の方が2年生よりも11項目のうち、9項目が平均値を上回り2年生の学習意欲が低いことがわかった。



## Ⅶ. おわりに

入学後も学習意欲を持ち続け、学習成果をあげていくためには教育内容の再検討が必要であることがわかった。講義内容の吟味、演習内容の充実、実習の時期や内容の検討が必要であり、早期から専門職業教育（プロフェッション教育）をすすめていく必要があることが示唆された。

## 引用文献

- 1) 社会福祉の動向編集委員会：社会福祉の動向 2004, 2, 中央法規, p102-106, 2004
- 2) 木村隆：介護福祉士の将来像と養成教育の課題と展望, 介護福祉教育12 (1) p9, 2006
- 3) これからの介護を支える人材について—新しい介護福祉士の養成と生涯を通じた能力開発に向けて—：介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直しに関する検討会, 2006

## 参考文献

- 1) 渡邊賢二：大学新生を対象とした不安, 社会的スキル, サポートの変化に関する研究, 鈴鹿医療科学大学研究紀要, 第12号, 2005
- 2) 谷 功：介護福祉士養成校卒業生の離職動機に関する研究, 第14回介護福祉学会誌2006
- 3) 中蔦 洋：保育および介護福祉領域における養成施設在学生の生きがい意識の比較に関する考察—都内某専門学校における生きがい意識調査(2002)の分析をとおして—介護福祉教育12 (1), 2004
- 4) 京極高信：これからの介護福祉教育について, 日本介護福祉学会誌 介護福祉教育12, (1), 2006
- 5) 田家英二：実習を通しての自己評価と自己受容について, 日本介護福祉学会誌 介護福祉教育12, (1), 2005
- 6) 中蔦 洋：介護福祉職の専門化に関する—考察—介護福祉士養成の視点から—介護福祉学, 12 (1) 日本介護福祉学会, 2005
- 7) 第4回 介護福祉士養成施設卒業生の就労実態調査報告書(平成16年3月卒業生), 日本介護福祉士養成施設協会, 進路問題研究委員会, 2006